

# 英語の所有の *have* と受身の *have* の意味のつながり

## ～認知文法的観点から～

中野裕太・加藤翔太・高濱汐音

### 1. はじめに

(1) a. She has a knife in her hand.

(宋 (2006: 35))

b. I had my hair cut.

(鷲尾 (1997: 47) 一部改変)

・町田(2005)は、部分全体/所有関係から日本語の受身の拡張過程(「直接受身」から「部分の受身」「所有の受身」「純粋な迷惑受身」)を分析。

(2) a. 敵がその侍を斬った。

b. その侍が敵に斬られた。

c. その侍が敵に腕を斬られた。

<譲渡不可能な所有>

(町田 (2005: 49))

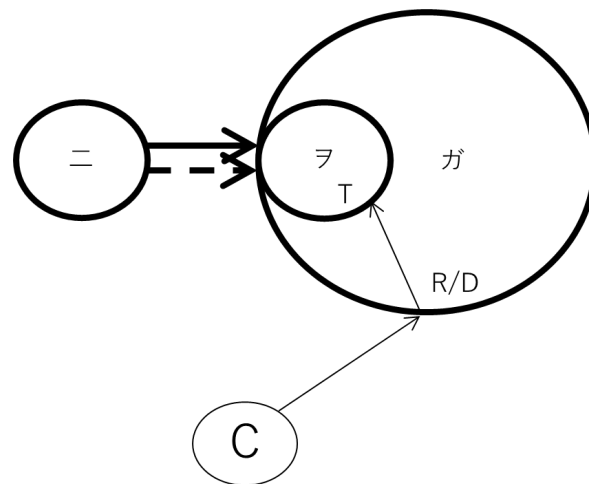


Figure 1 (2c)のスキーマ (町田 (2005: 50))

。

(3) a. I have my picture taken on the ice.

(COCA)

b. I had my eyes closed.

(COCA)

c. I had my wallet stolen yesterday.

➤町田(2005)の分析は使役・受身の *have* にも適応でき、所有の *have* との関連性が高いのでは。

(4) 目的

認知言語学的枠組み(Langacker (1993), 町田(2005))から、所有の *have* と使役・受身の *have* 構文の関連性を説明する。

(5) 主張

Langacker (1993)の所有の *have* と、町田 (2005) による日本語受身文の2つの認知文法を用いた分析から、所有の *have* 構文と使役・受身の *have* 構文の意味的關係性を説明することができる。

(6) 構成

2 節 使役と受身を表す *have* の特徴

3 節 分析の前提 ～認知文法の観点から～

4 節 所有の *have* と使役・受身の *have*

5 節 まとめ

## 2. 使役と受身を表す *have* の特徴

### ● Washio (1993)

- (7) a. ジョンは自分の車を洗わせた。  
b. John had his car washed.  
c. その車はジョンによって洗われた。  
d. The car was washed by John.

- (8) a. John-ga Mary-ni hon-o yom-ase-ta  
John-Nom Mary-Dat book-Acc read-Cause-Pst  
'John had Mary read the book.'  
b. John-ga Mary-ni hon-o yom-are-ta  
John-Nom Mary-Dat book-Acc read-Pass-Pst  
'John was affected by Mary's reading the book.'

(Washio (1993: 68))

- (9) a. Person → Event: causal relation  
b. Person ← Event: passive interpretation.

(Washio (1993: 68))

(10) Jean had his car crushed by a truck.<sup>1</sup>

(11) a. Jean → [a truck crush(ed) a car]

b. Jean ← [a truck crush(ed) a car]

(Washio (1993: 68-69))

(12) 私は妻に書類を燃やされた。

(Washio (1993: 79))

a. 関与解釈: 「書類」が私の所有物であり、それが燃やされたことによって「私」が影響を受けた。

b. 排除解釈: 「書類」が「私」の所有物であるかどうかは問題にならず、「妻が書類を燃やす」という Event 自体によって影響を受けた。

(13) a. John<sub>i</sub> had his<sub>i</sub> hair cut by Bill.

<使役・受身の解釈>

b. John had Mary's hair cut by Bill.

<使役の解釈>

(Cf. Washio (1993: 49))

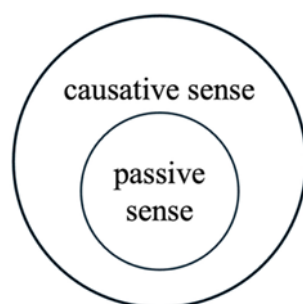


Figure 2 *have* 構文の非対称性 (Washio (1993: 73))

(14) a. John was praised by Mary.

b. Hanako had her son praised.

c. Hanako had Akiko's son praised.

d. \*Hanako had Taro cried.

<sup>1</sup> Washio (1995)はさらに、(10)の曖昧性を Jackendoff (1990) の枠組みで概念構造(conceptual structure)を用いて説明している。概念構造は appendix に掲載している。

| 表す意味      | 例文 | 関与 / 排除 |
|-----------|----|---------|
| 直接受身      | a  | 関与      |
| 間接受身 / 使役 | b  |         |
| 使役        | c  | 排除      |
| *間接受身     | d  |         |

Table 1 受身と使役の表現のまとめ

(鷲尾 (1997: 47) 一部改変)

### 3. 分析の前提 ～認知文法の観点から～

#### 3.1 Langacker (1993)

##### (15) 参照点（能力）

ある1つの要素（参照点）を経由して実際の表現の対象となるターゲットを想起する能力のこと。

##### (16) 参照点モデルの構成要素

C (Conceptualizer)：概念化主体：話し手や聞き手

R (Reference point)：参照点。ターゲットに到達するための足がかりとなる、顕著な実体。

T (Target)：ターゲット。参照点を通してメンタル・コンタクトしようとする対象。

D (Dominion)：支配領域：特定の参照点から直接アクセス可能な概念領域。

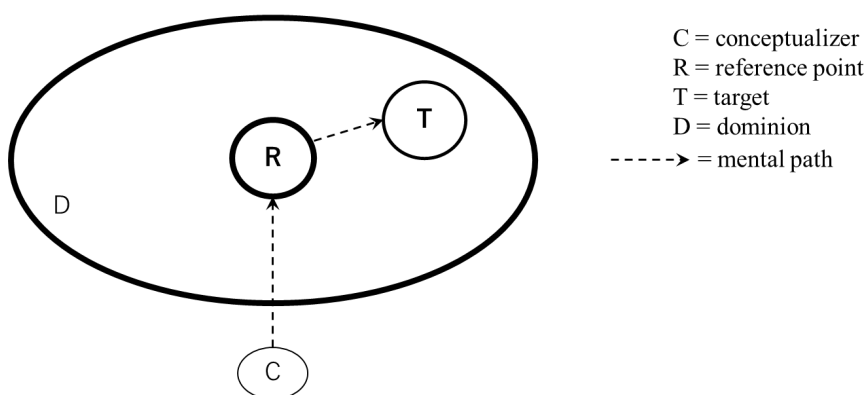


Figure 3 参照点モデルの構成要素 (Langacker (1993: 6))

## ●所有表現の分析

### (17) 所有表現の課題と既存分析の問題点

所有表現（例：my watch, Sally's dog, the book's weight, Lincoln's assassination）は、所有権・親族関係・部分全体関係・身体部位など多様な関係を表す。

### (18) 参照点モデルによる統一的説明

所有表現に共通する抽象的なスキーマを「参照点関係」と捉える。

- a. プロトタイプ：単一のプロトタイプではなく「所有権」「親族」「身体部位」「部分全体」といった参照点関係に組み込まれた複数の概念的  
原型を中心にモデルを形成している。
- b. スキーマ：所有表現はすべて「所有者」とラベル付けされる実体を R とし、所有物(T)にメンタル・アクセスを確立する構造をもつ。

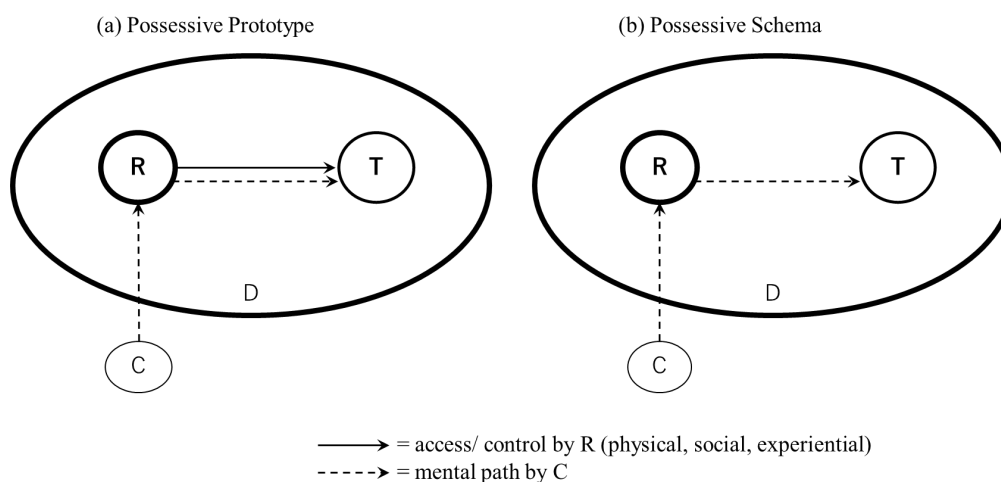


Figure 4 所有表現のスキーマ (Langacker (2009: 84))

### (19) 所有表現の下位分類

- ・親族：親族名称は特定の「自我(ego)」を基準（参照点）として初めて意味をなす。
- ・部分全体：全体は部分に対する自然な参照点である。
- ・身体部位：通常、私たちは「肘」や「尻尾」が世界で単独に存在しているとは考えず、特定の「人」や「動物」という全体を参照して初めてその部分を同定する。
- ・所有の *have* の事例
  - (20) a. She has a knife in her hand. <所有>
  - b. He has a world record in marathon. <(抽象的)所有>

- |                                 |        |                      |
|---------------------------------|--------|----------------------|
| c. I have a sister.             | <親族関係> |                      |
| d. The table has four legs      | <身体部位> |                      |
| e. He has blue eyes.            | <部分全体> |                      |
| f. The box has an apple in it.  | <包含関係> |                      |
| g. we have the sea on our left. | <位置関係> | (宋 (2006: 35), 一部改変) |

### 3.2 町田 (2005)

- (21) a. 僕が先生に褒められた。<中立受身>  
 b. 監督が選手たちに帰られた。<被害受身> (町田 (2005: 45))

- (22) a. \*太郎は、ものすごい大きな地震に起きられて、死んだ。  
 b. 予知もしていないのに、こう何度も地震に起きられては、信用まるつぶれだな。  
 (町田 (2005: 45))

●町田(2005)では、ガ格とヲ格の部分全体の関係になっていることと、「直接受身」から「部分の受身」「所有の受身」「純粋な迷惑受身」へという構文の連続性があることを指摘している。

#### ・部分全体の関係<sup>2</sup>

- (23) a. 敵がその侍を斬った。  
 b. その侍が敵に斬られた。  
 c. その侍が敵に腕を斬られた。 <譲渡不可能な所有>  
 (町田 (2005: 49))

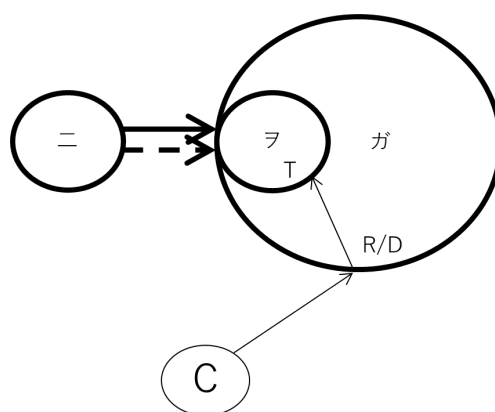


Figure 5 (23c)のスキーマ (町田 (2005: 50))

<sup>2</sup> 寺村(1982)、柴谷(1997)によって、ガ格参与者とヲ格参与者が部分全体関係、所有関係にある場合があると指摘されているが、このような事例がどのように構文の拡張に寄与しているかの考察はない。

・所有の関係

(24) a. 太郎が先生に息子を殴られた。

[太郎の息子]

<譲渡可能・不可能な中間段階>

b. 太郎が誰かに車を壊された。

[太郎の所有物である車]

<譲渡可能な所有>

c. 太郎が次郎に学校を馬鹿にされた。

[太郎の通っている学校]

<所有としては周辺的な段階>

(町田 (2005: 49))

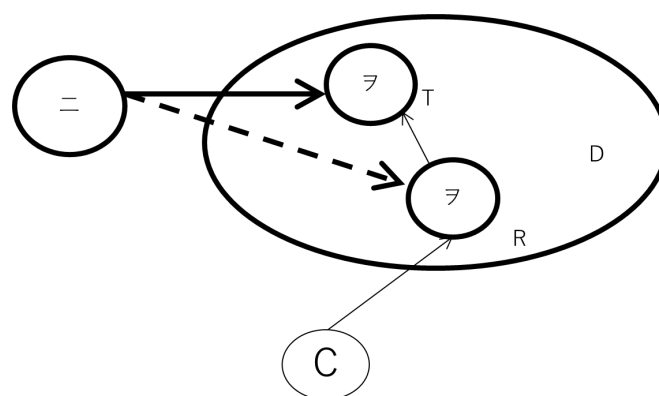


Figure 6 (24c)のスキーマ (町田 (2005: 50))

4. 所有の *have* と使役・受身の *have*

(25) a. Hanako had her son praised.

b. Hanako had Akiko's son praised.

c. \*Hanako had Taro cried.

(鷲尾 (1997: 47) 一部改変)

| 表す意味      | 例文 | 関与 / 排除 |
|-----------|----|---------|
| 間接受身 / 使役 | a  | 関与      |
| 使役        | b  | 排除      |
| *間接受身     | c  |         |

Table 2 使役・受身の *have* 構文のまとめ (鷲尾 (1997: 47) 一部改変)

・所有概念を含む使役・受身の *have* 構文

→ 「所有」「親族」「身体部位」「部分全体」といった参照点関係に組み込まれた複数の概念的原型を合わせたモデル。

- |                                                  |        |        |
|--------------------------------------------------|--------|--------|
| (26) a. Tom had his car stolen.                  | <所有>   |        |
| b. I have no family left.                        | <親族>   |        |
| c. Norman has his back turned against her.       | <身体>   |        |
| d. That voter had their voice heard in November. | <部分全体> | (COCA) |

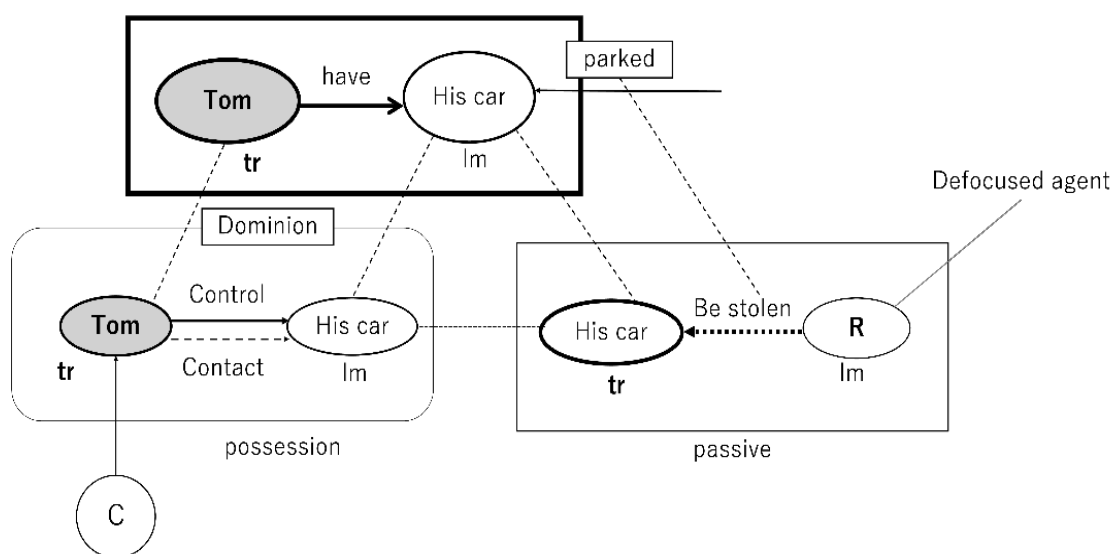


Figure 7 所有概念を含む使役・受身の *have* 構文

➤所有の認知プロセス(左下)と defocusing agent/動作主の脱焦点化に関わる受身化のプロセス(右下)が関与し、2つのプロセスが統合することで使役・受身の *have* が形成。



- ・所有関係を含まない使役の *have* 構文

(27) Hanako had Akiko's son praised.

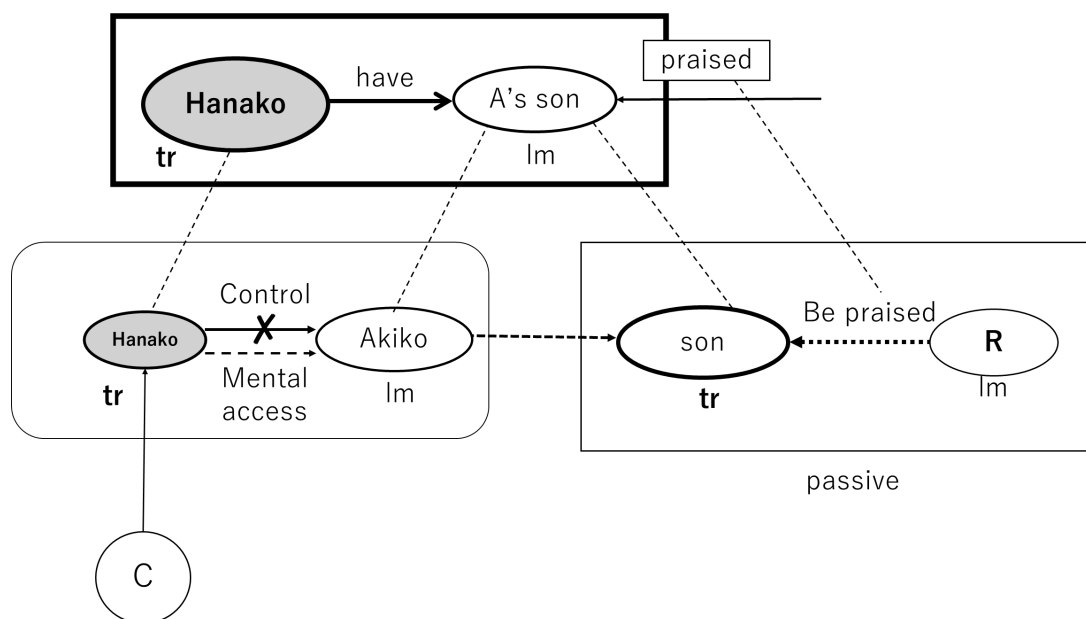


Figure 8 所有関係を含まない使役の *have* 構文

➤ Control から派生し、直接的あるいは間接的な接点を示す Mental access になる。

## 5. まとめ

(28) 目的

認知言語学的枠組みから、所有の *have* と使役・受身の *have* 構文の関連性を説明する。

(29) 主張

Langacker (1993) の所有の *have* と、町田 (2005) による日本語受身文の 2 つの認知文法を用いた分析から、所有の *have* 構文と使役・受身の *have* 構文の意味的関係性を説明することができた。

## REFERENCES

- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Langacker, Ronald W. (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics*, 1(1), 5–38.
- Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point constructions, *Cognitive Linguistics*, 4(1), 1–38.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, New York: Mouton de Gruyter.
- 町田章 (2005) 「日本語被害受身文の間接性と概念性—認知文法的アプローチ—」 『語用論研究』 7, 45–62, 日本語用論学会.
- 柴谷方良 (1997) 「『迷惑受身』の意味論」, 川端善明, 仁田義雄 (編) 『日本語文法—体系と方法—』, 1–22, ひつじ書房, 東京.
- 宋昌代 (2006) 「多義語 have のネットワークモデル—認知言語学的観点から」, 言語科学論集, 35–56.
- 谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』, ひつじ書房, 東京.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味I』, くろしお出版, 東京.
- Washio, Ryuichi. (1993) When causatives mean passives: A cross-linguistic perspective. In *Papers from the 25th Annual Meeting of the North East Linguistic Society*, 65–86.
- 鷲尾龍一, 三原健一 (1997) 「ヴォイスとアスペクト」, 中右実 (編) 『日英語対照選書 7』, 研究社.

## Appendix

### 脚注 1

- a. 
$$\left[ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} \text{CAUSE } ([\alpha], [\text{CRUSHED } ([\beta])) \end{array} \right] \\ \left[ \begin{array}{c} \text{EVENT AFF } ([\text{TRUCK}]_{\alpha}, [\text{CAR}]_{\beta}^A) \\ \text{EVENT AFF } ([\text{JEAN}]_A, ) \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- b. 
$$\left[ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} \text{CAUSE } ([\alpha], [\text{CRUSHED } ([\beta])) \end{array} \right] \\ \left[ \begin{array}{c} \text{EVENT AFF } ([\text{TRUCK}]_{\alpha}, [\text{CAR}]_{\beta}^A) \\ \text{EVENT AFF } ( , [\text{JEAN}]_A) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(Washio (1993: 70))